



亡命知識人と大衆社会-社会史的背景と知識社会学的考察- (1)

三上, 剛史

(Citation)

国際文化学研究 : 神戸大学国際文化学部紀要, 9:1-28

(Issue Date)

1998-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81001195>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81001195>



「亡命知識人と大衆社会——社会史的背景 と知識社会学的考察——」(一)

三上剛史

——目次——

一 亡命知識人と周縁性仮説

- 1 アメリカ精神の「脱地方化」?
- 2 英米型民主主義との邂逅
- 3 ドイツ型大衆社会と英米型大衆社会
- 4 ワイマール期ドイツの遺産と知識人

二 二つの大衆社会——即自的大衆社会と対自的大衆社会——

- 1 ドイツの特殊性と大衆化
- 2 教養市民層
- 3 「読書人の没落」と社会学
- 4 二つの大衆社会の出会い

注(一)・文献表

——以上、本号
以下、次号

三 理論的変容

- (1) マンハイム
 - 1 自由浮動的知識人と総合
 - 2 エリートと社会計画
- (2) ホルクハイマーとアドルノ
 - 1 社会研究所と学際的研究
 - 2 大衆文化批判

四 小括

注(二)・文献表

一 亡命知識人と周縁性仮説

1 アメリカ精神の「脱地方化」？

第二次世界大戦によってドイツとオーストリアを追われた亡命知識人の経験と彼等がもたらした影響についての研究としては、ルイス・A・コーザーの『亡命知識人とアメリカ』（*Refugee Scholars in America ; Their Impact and Their Experiences*, 1984）がよく知られている。コーザーによれば、「アメリカの歴史のなかで、亡命者たちが到来したニューディール時代ほど、新しい思想に対して顕著な受容性をみせた時代は他にあまりない」（Coser, p.xii; viii 頁）。彼等の大部分はユダヤ系であることによって亡命を余儀なくされた人々であり、概して、母国での地位に比べれば決して高いとは言えない待遇に甘んじていた。

彼等のアメリカでの成功・不成功と、彼等がアメリカに与えた影響の程度は学問分野や学派のあり方によってさまざまであるが、コーザーはそれを「周縁性と批判的視座」（marginality and critical perspective）によるものと見ている。「知識人がアメリカに与えた影響は、H・スチュアート・ヒューズがアメリカ精神の脱地方化 *deprovincialization* と呼んだものによって、もっともよく要約されている。……亡命者たちは、彼等が周縁的なままでいたことで、アメリカ精神を脱地方化し、アメリカ文化を質的に向上させることができた。周縁的であることが、彼等が、自分たちの伝統を尊敬しつつ生まれ育ったものたちの場合よりもずっと、アメリカの社会と学問とに新しくより透徹した光を投ずることを可能にした。アメリカ文化に深く浸みわたっている目先への関心と楽天主義とはしばしば衝突するような歴史的で批判的な伝統を深く持して、彼等は周縁的の学者としての有利な立場からその特権を行使して、別のやり方で考え、そうすることでアメリカの知的平和の有益な攪乱者になったのである」（*ibid.*, pp.10-11; 10-11頁）。

コーザーはアメリカ文化が亡命知識人によって影響される側面を指して「アメリカ精神の脱地方化」と呼ぶのだが（1）、ここでわれわれが注目したいのは、むしろ亡命知識人自身の内的変容——もしこう言ってよければ、彼等の学

問研究における視点と内容の固有の変化——である。コーザーが言うような形で「周縁性」がダイレクトに「脱地方化」を促進したのではなく、亡命知識人自身の内的変容が当該亡命地の社会的・文化的要請と合致したと見るべきではないか。

このことは「脱地方化」という言葉の解釈にも大きく関わっている。この言葉のそもそもの出所はポール・ティリヒの述懐である。ティリヒはフランクフルト大学でマックス・ホルクハイマーやカール・マンハイムと交流のあった神学者であるが、ユダヤ系であることを理由に彼等と共にフランクフルト大学を追われた。アメリカ移住後は反逆的煽動性を抑え、「神学でのティリヒは、心理学でのエーリヒ・フロムとちょうど同じように、空前の物質的繁栄のただなかで、アメリカの精神的荒廃に漠とした不安を抱いて心を揺すられた人びとに対する精神的治療を提供しようとしたのである」(ibid., p.318; 354-355頁)。

新しくアメリカにやってきた知識人達は、アメリカの反知識主義に出会って自分達の思想を誰にでも分かる形に作り変えるよう要求されたが、ティリヒはこのことを友人テオドル・アドルノに対して「自分を脱地方化した」経験として語っている。これはヒューズの『大変貌』(*The Sea Change ; The Migration of Social Thought 1930-1965*, 1975)にも引用されている。念のためその部分を原文のまま引用すると以下のごとくである：

Paul Tillich has spoken of this experience as having “deprovincialized” him, …… (Hughes, 1975, p.3)。この部分はアドルノによって次のようにも展開されている。「私はもはやヨーロッパで歴史的に展開してきていた状況を当然のものともみなすという考え方にとられることはなくなっていた——要するに「ものごとを自明視しな」くなっていた。すでに故人となった友人ティリヒは、かつて自分はアメリカではじめて偏狭性をうち破られた、と語ったことがある。彼もまた、おそらくこれと似たようなことを感じていたのである」(Adorno, 1968, p.367; 70頁)。

このティリヒとアドルノの記述に忠実に解釈するならば、「脱地方化」され

たのはアメリカ精神ではなく彼等の中にあったヨーロッパ的精神である。アメリカ精神は亡命知識人のヨーロッパ的精神が「脱地方化」されること、すなわちドイツ的文化がアメリカ文化に遭遇することからその果実を得たのである。それゆえ、コーザーの言うように亡命知識人のマージナリティがアメリカ精神の偏狭性を打破したのではなく、ドイツ・オーストリアからの亡命知識人がまずアメリカの社会と文化から大きな影響を受けて変容し、そこからもたらされた理論的貢献がアメリカ社会の文化的展開に大きく寄与したと見るべきであろう。そしてこのことはアメリカに限らず、もう一つの亡命地であったイギリスについても当てはまるはずである。この点は、アメリカに亡命したアドルノと、イギリスに亡命したマンハイムが、その亡命先の社会に対して同じような特性を見取っていることから推察される。

2 英米型民主主義との邂逅

マンハイムそしてアドルノとホルクハイマーは同じくフランクフルト大学に拠りながらも理論的には大きく対立していた。その彼等が同じ理由で亡命を余儀なくされ、社会研究所長であったホルクハイマーはジュネーヴ経由でアメリカに亡命し、アドルノはイギリス経由でアメリカに渡りホルクハイマーの「社会研究所」に正式加盟するが、やがて「社会研究所」の帰独と共にドイツに戻った。マンハイムはアメリカ亡命を目指していたが結局果たせず、イギリスでしかるべき地位を得た後にその地で没した。マンハイムとアドルノが、各々アメリカ社会とイギリス社会をドイツ社会と比較して次のように特徴づけている。

アドルノは言っている。「要点を明確にすればこういうことだ。つまり、徹底して社会批判を行い、経済的要因の優位性を十分承知していた私であったにもかかわらず、精神——「Geist」——のもつ根本的な重要性という考えは、そもそもの出発点から、私にとって自明にして疑うべからざる半ばドクマのようなものであったということ、これである。このことが自明の理ではないという事実を、私はアメリカではじめて知った。というのも、ここはなんであれ、

現下の精神的な問題に対するやうやしい沈黙などというのはまるで見当たらず、中部ヨーロッパや西ヨーロッパのように、そうした態度がいわゆる教養階級以外の人々の間にまで浸透しているのとは、まるで異質状況がみられたからである。……これよりいっそう根本的で、かつまた幸運だったのは、民主主義的諸形式の実質的内容を経験できたことであつた。アメリカではこうした形式が生活の全領域にまで浸透してきているのに対し、ドイツでは、少なくともそれがゲームの形式的規則以上のものであつたためしは一度もなく、今日でもなおその段階をなんら越えていないのではないかと、私は恐れている」

(Adorno, op.cit., p.367; 70-71頁)。そしてファシズム的潮流に対する抵抗力は、アメリカにおいて「おそらくヨーロッパのいかなる国よりも強力だといってよい——ただしイギリスというありうる例外を除いては」と言う。

アドルノはアメリカの文化になじむことはできず、『啓蒙の弁証法』(*Dialektik der Aufklärung ; Philosophische Fragmente*. 1947)でもアメリカの文化産業を批判しているが、「社会研究所」がドイツへ引き揚げる際にはある種の希望を抱いてもいたのである。「アドルノは、たしかに別の脈絡でアメリカの商業主義と通俗性の浸透を嘆いているが、いまの場合にはむしろ真に、政治的に価値あるものなにかが自分と一緒に大西洋を横断して運ばれたきた、という信念を胸にいだいて、ヨーロッパに帰ってきたのである」(Jay, 1986, p.124; 216頁)。

一方のマンハイムについてヒューズは『大変貌』の中で、イギリスへの亡命が『イデオロギとユートピア』に見られた理論的関心をさらに深めるのを妨げたとしている。「1933年のイギリスへの亡命は、彼をウェーバー死後のドイツにおけるもっとも創意ある社会学者たらしめていたあの理論的関心を、さらに深めるのを妨げた。彼は、知識社会学への関心を実質的に放棄し、応用的な、また宣伝的でさえある仕事に向かつていった」(Hughes, op.cit., p.75; 58頁)と見ている。だがこのような規定をそのまま受け入れることはできない。

マンハイムは『変革期における人間と社会』(*Man and Society in an Age of Reconstruction ; Studies in Modern Social Structure*. 1940)で次のように言っ

いる(2)。「著者は、まさにこの問題をドイツ的な観点およびイギリス的な観
 点の双方から考えるようになって、非常に大きな利益を得た。現在の形におけ
 る本書は、最初は著者のドイツにおける経験により、後にはイギリス的思考方
 法によって影響されており、そしてこの両者を調和しようと企てたものであ
 る。……このような経験の故に、著者は、古い意味における自由放任はもはや
 効果がないこと、産業的社会的現段階にあつては何らかの形における計画が不
 可避的であることをさとったのであった。しかし……著者は……民主主義的体
 制は既にその過程を歩み終わった、という中部ヨーロッパに流行せる感情に、
 無意識のうちに与していた……。この英語版はほとんど新著であるといえよ
 う。……見解上の差異として最も重要な点は……近年来、著者が自由主義的民
 主主義がほとんど攪乱されることなく機能を果たしている国に生活してきたと
 いうことである。このことによって、著者は、その原理の効果を身近に研究す
 る機会を持った。それは、著者の経験の骨組みを拡大し、われわれの時代にお
 ける民主主義の存続力に関する根強い懷疑から著者を解放するに役立ったもの
 である」(Mannheim, 1940, pp.4-5; 3-5頁)。

3 ドイツ型大衆社会と英米型大衆社会

マンハイムとアドルノは英米の社会に民主主義のあるべき姿を見たのである
 が、同時にそこに大衆社会の危機をも見いだしている。それゆえ、その後の彼
 等の仕事は「産業化された大衆社会」をめぐる問題に収斂してゆく。その際わ
 れわれは、アドルノにおいて「理性」と「啓蒙」が、マンハイムにおいては
 「知識人」と「エリート」が理論的展開の中心となっている点を見落としては
 ならない。

確かに彼等はそれまでの英米社会にはないタイプの新しい大衆社会論を供給
 し、そのことによって英語圏の社会学に大きく貢献した。しかしそれは、決して
 コーザーが言うような意味での「アメリカの脱地方化」ではなく、また、彼
 等亡命知識人が「周縁的」存在であったからでもない。それは、彼等自身が自
 ら「体験」した二つの異なるタイプの社会(ドイツ的社会と英米社会)の差異

を、ある仕方で連続的に結びつけ得たからである。アドルノもマンハイムも、そして他の亡命知識人達も、もっぱら新しい社会と出会ったことから来る理論的展開に関心を集中していて、そもそも彼等が「移動」したことの社会的意味がどこにあるのかについては深く考えなかった。

では、ドイツ社会とアメリカ＝イギリス型社会との差異とは何であろうか。彼等自身はそれを「民主主義」の存在様式として理解していたが、われわれはそれ以上のことを理解しなければならない。ワイマール共和国の成立と崩壊を軸として当時の社会情勢を顧みるとき、ややもすると政治的要因のみが強調されがちであるが、社会学者の眼から見た場合、むしろこの時期の先進資本主義諸国を特徴づける要因として忘れてはならないのは大衆社会の形成という論点である。

大衆社会がファシズムを生み出すメカニズムについては、同じくアメリカに移住したエーリッヒ・フロムの『自由からの逃走』(*Escape from Freedom*. 1941) やエミール・レーデラーの『大衆の国家』(*State of the Masses*. 1940) でも詳しく分析されている。だが、ここで追究したいのはそのような大衆社会の構造的危険性ではない。そうではなくて、マンハイムやアドルノ、ホルクハイマー等が異なるタイプの大衆社会をどのように体験し、そのことによって彼等の理論がどのように変容したかである。

英米型大衆社会とドイツ型大衆社会とは、おなじく産業化された大衆社会でありながらも、その生成様式と成熟度は異なっている。特に、アドルノが指摘していたように、精神的なものに対する知識一般のあり方や、あるいは、マンハイムが問題にする知識人の社会的役割についての差は大きい。それゆえ、社会階層としての知識人と大衆社会の生成との係わりに焦点を当て、ドイツにおける大衆社会のあり方と英米におけるそれとの差異に注目することから始めたい。そのような差異が亡命知識人に固有の理論的変容をもたらし、また、彼等の理論が英米型大衆社会において受容される基盤ともなったという観点からこの問題に接近したいと思う。

それゆえ、キー・ワードは「大衆社会」である。ドイツ型大衆社会と英米型

大衆社会の差が亡命知識人による理論的貢献を可能にしたのであり、それが戦後の社会理論形成に適度の理論的緊張を与えた。ワイマール時代を「黄金の1920年代」「現代思想の坩堝」(3)と呼ばしめ、後の歴史にとっての一種の知的「さなぎの時代」として回顧せしめる原因はそこにあると言えよう。「1920年代末のドイツは——見かけ上は繁栄と安定のうちにあったが——ヨーロッパ社会思想が過去半世紀になにを成しとげてきたかについての経過報告をする最後の努力に恰好の舞台であった。ヨーロッパ史上、これほどに教育高く、文化的に目覚めた国民はいなかったし、諸種のイデオロギーの葛藤がこんなに激しかったこともなかった。ヴァイマール体制のドイツは、すべての価値が検討に付され、「これまで人類の思想がその養分を吸い取ってきた」生きた「根が掘り出された」状況を観察するのに、まず理想的な実験室の条件をそなえていた。断崖の縁に立って、ドイツ知識人のなかでも感覚鋭いひとびとは、世にいう死に臨んでの透察力を思わせるような強靱な意識をもつにいたった」(Hughes, 1958, p.421; 284頁)。

4 ワイマール期ドイツの遺産と知識人

今日の社会が問題にすべき社会・文化の問題点の多くがワイマール時代において提起されており、この時代が現代の思想的営為に対して大きな意味を持つのは、それが近代社会生成の途上で一つの重大な緊張を孕んだ時代であったからである。その緊張の源が「大衆社会」の形成というそれまでの近代社会にはない新しい出来事であり、そこでの危機意識と理論的彫琢が後に英米型の産業社会化された大衆社会との出会いを通して発展されたと見ることができる。近代の知的伝統を総決算しつつ大衆社会と正面から向き合ったドイツ文化は、そのような生みの苦しみを味うことのなかった英米型文化にとっては理論的先駆者であった。一方、産業社会の成熟という点でドイツより先進的であったアメリカ＝イギリスの社会は、より民主化された大衆社会という意味で、ドイツ文化に対して一種の現実的先行者として現れた。このギャップこそが亡命知識人に固有の理論的展開と活躍の場を与えた基盤である。

このギャップの大きさは彼等亡命知識人の研究分野によってまちまちであった。例えば、同じフランクフルト学派でも、精神分析のフロムは早くからアメリカ社会に受入れられ「駅の売店でペーパー・バックで売られる」ほど人気があった。これに対して、他のメンバーは比較的アメリカ文化から孤立しており、ホルクハイマーとアドルノ等のフランクフルト学派そのものが注目されるようになるのは「研究所が合衆国を去ってから15年後にマルクーゼの人气が突如高まって研究所の仕事への関心を再びかきたてた」からである (Jay, op.cit., p.54; 107頁)。しかしながら、社会学と社会心理学の分野における影響の主脈はかなりはっきりと見て取れる——ポール・F・ラザースフェルドの調査研究を例外とすれば(4)。イギリスにおけるマンハイムの主たる理論的貢献が大衆社会に関するものであったように、後に「フランクフルト学派」(5)として一般に流布する「社会研究所」のメンバーによる社会学的貢献は大衆社会の文化とメンタリティに対するものであったと言える。

アメリカに亡命したドイツ語圏の社会学者について言えば、実際には「ほんの僅かの亡命社会学者だけが帰化したこの国で重要な寄与をした」(Cosser, op.cit., p.85; 92頁) のであるが、アルフレッド・シュッツとラザースフェルドを除けば、影響を残した社会学者の学問的傾向は何らかの形でマンハイム系の知識社会学に連なる者(この代表として、ハンス・ガースとクルト・H・ヴォルフがおり、それぞれM・ウェーバーとG・ジンメル翻訳者であるとともにマンハイム知識社会学の紹介者として知られている)とフランクフルト学派の二系統に収斂してくる。これら二系統の影響下に、後のC・ライト・ミルズやD・リースマンの仕事が可能になり、また、シュッツの影響を受けたP・L・バーガーとトーマス・ルックマンの現象学的知識社会学が可能となっている。もともと、イギリスでのマンハイムの活動に比べれば、アメリカでのホルクハイマー＝アドルノ等の活動は限られており、学界ではほとんどインパクトを与えなかった。アドルノの名前も『権威主義的パーソナリティ』(*The Authoritarian Personality*, 1950)の著者の一人という以上のものではなかった。

このような一定のタイム・ラグはあるものの、「批判理論」が50年代に影響を

与えたひとつの領域があった。それは、その10年間の半ばに最高潮に達した大衆文化論争である。……アメリカはワイマール〔文化〕の亡命までは社会と文化の「大衆化」の危険に反応するのが遅かった。……40年代と50年代になると、ハンナ・アレントやエーリッヒ・フロムのような亡命者たちの影響力が感じはじめられていた。……最近のファシズムの恐怖は記憶に新しかったので……亡命者たちはしばしば、大衆文化を大衆社会に、究極的には全体主義に結びつける分析を提案していた」(Jay, op.cit., pp.46-47; 96頁)。「社会研究所」の研究誌である『社会研究誌』が英語で出版されるようになると、「これらの論文は、まだ萌芽的ではあったが大衆文化論争へのフランクフルト学派の最初の主要な貢献であった。後年の論争における中心人物のひとりデイヴィット・リースマンは、まだ地図のない領域へのこれらの最初の踏破的研究を読んだときに彼や他の人びとが感じた興奮を証言している」(ibid., p.48; 98-99頁)。

これらのことから、われわれはドイツ語圏の亡命社会学者が与えた（もしくは、彼等自身が被った）理論的影響の主たるものが大衆社会に関する事柄であったことを見て取ることができる。「ヨーロッパの亡命者たちが教え子の学生たちにもたらしたものは、ヨーロッパの古典的社会学者たちの重要性を伝えることに加えて、アメリカの同僚たちにしばしば欠如していた歴史と歴史的危機の感覚であった」(Coser, op.cit., p.86; 93頁)。その歴史的危機の感覚こそがドイツの大衆社会の抱えていた問題であり、そこで研ぎ澄まされた問題意識こそが、ワイマール期ドイツの遺産として無自覚的大衆文化への批判的契機となり得たのである。

したがって、コーザーが言うような意味でアメリカが特殊だったのではなく、むしろ、ドイツ社会とそこで育まれた学問傾向が特殊だったと言うべきであろう。産業化された大衆社会の生成という点から見ると、アメリカ、イギリス、フランスと比較して、ドイツはある特殊な事情を抱えていた。このことがワイマール期ドイツの学問的豊穰性を生み、後に戦後の英米型大衆社会を批判的に捉えるための理論的蓄積を可能にしたのである。この点を明瞭化するために、本論ではマンハイムのイギリス亡命とフランクフルト学派のアメリカ亡

命を導き手としながら亡命知識人と大衆社会の問題を考察してゆきたいと思う。彼等の学問的影響の範囲が事実上どの程度であったのかを考量・確定することが目的なのではない。亡命によって彼等の学問が一定の仕方に変容したこと、そのことによって、彼等の学問が直接・間接に亡命地の学問形成に少なからぬ影響を与えたということ。その原因を彼等が経験した二つの大衆社会の差異に求めるという作業が本論の目的とするところである。

さらに付け加えるならば、マンハイムとフランクフルト学派（特にホルクハイマーとアドルノ）を対照項として選ぶことにはもう一つの利点がある。マンハイムとフランクフルト「社会研究所」は在独時代から理論的対立関係にあったが、亡命後の変容から逆照射するとき、そこでの「対立」の構図がある形で浮き彫りにされる。ドイツ時代の両者の対立は主として「全体性」(Totalität)をめぐる観点の相違に基づくものであった。やや単純化して図式化するならば、左翼的マルクス主義的観点をとるか、マンハイムの言う「総合」をとるかの違いに帰結する問題である(6)。この対立点はほとんど調停しようのない根本的相違にも見えるが、実は「知識人」にとってのイデオロギー問題であった。

マンハイムが「自由浮動的知識人」による「総合」を「エリート」による「社会計画」に軌道修正し、一方のホルクハイマー、アドルノ達は大衆文化批判へと向かう。アドルノは終生「精神」的なものから離れることはなかったが、先にも引用したように、アメリカ大衆社会に触れて「精神の持つ根本的重要性が自明の理ではない」ことに気づいている。ドイツに帰ってからその点では変化はなく、社会革命の担い手を見失うとともにパシビズムを深め、ハーバースの言葉を借りるならば「秘儀的芸術作品の中に閉じ籠もってしまう」ことになった。ここからうかがえる両者の「対立」を支える基盤は、「知識人」というものが一定の「精神」を代表し社会に対して指導的役割を果たすという知識人の自己了解である。彼等のイデオロギー的対立はいわば教養主義という共通基盤の上ではじめて可能になる理論的対立であって、知識人の教養主義的前提が崩れてしまったところではその意義は薄れてゆかざるを得ない。

これまで考察してきた諸点に鑑みると、われわれはワイマール期ドイツに顕著な一つの社会特性、すなわちドイツ型大衆社会の生成と教養知識人層の没落という特殊ドイツ的テーマに行き当たらざるを得ない。次節においてまずこの点を検討しておきたい。

二 二つの大衆社会——即自的大衆社会と対自的大衆社会——

1 ドイツの特殊性と大衆化

19世紀末から先進資本主義諸国では大衆社会が形成されはじめるが、その中でドイツはある特殊な事情の下で大衆社会化することになった。

「旧帝政時代のベルリンは世界都市に急膨張はしたものの、プロイセン軍国主義の支配下であって、・・・表面的にはまだ旧体制の枠内に押さえこまれていた。第一次大戦の敗戦をきっかけとするドイツ帝国の崩壊とドイツ共和国の成立（1918年）は、古い枠組みを揺るがし、ベルリンをプロレタリアート大衆と都市サラリーマン大衆との二つの顔を持った、現代型都市大衆社会に変貌させた。敗戦による経済的困難にもかかわらず、旧体制の桎梏から解放されたベルリンは、急速に現代資本主義の発展とそれに対立する諸勢力の角逐する場として、ポジティブな意味でもネガティブな意味でも、現代的性格をリードしていった。ニューヨークが主として資本主義の「商業主義」的側面の発展をリードしていたとすれば、ベルリンは大衆社会の二重の顔が生み出す諸問題の収斂点として、ニューヨークと並ぶ意味を持つ場所となった」（平井、1983、5頁）。

このようなドイツ型大衆社会は一方で華やかな文化を開花させるが、同時に大きな政治的・文化的緊張を孕んでもいた。第一次世界大戦の敗戦の結果成立した「ブルジョワ民主主義」のワイマール共和国は、社会民主主義とブルジョワ民主主義の妥協の産物であった。それは労働者階級＝プロレタリア大衆に支持された左翼である社会民主党と、表向きはカトリックを代表する中央党ならびにブルジョワ階級を代表するドイツ民主党との混成物であった。後の二者が事実上はブルジョワにも一般大衆にも支持されていなかったことはよく知られ

ているが、その原因の一つが、マンハイムやアドルノも言っていたような意味での市民的民主主義の未成熟にあり、これがファシズムの形成を可能にしたことは確かである。

もちろん、ここで言うような意味での大衆化と民主主義の後退に関する政治文化的議論は、例えばカール・マンハイムが『イデオロギーとユートピア』 (*Ideologie und Utopie*, 1929) においてワイマール期に論じているし、またエミール・レーデラーやエーリッヒ・フロムが亡命後にそれぞれ『大衆の国家』 (*Lederer*, 1940)、『自由からの逃走』 (*Fromm*, 1941) でつとに指摘していることでもあり、後のアメリカ大衆社会学でこの問題を引き継いだウィリアム・コーンハウザーの『大衆社会の政治』 (*The Poitics of Mass Society*, 1959) でも踏襲されている基本図式である。

「労働者階級や自由主義的、およびカトリック的なブルジョアジーの消極的あきらめの態度と対照的に、ナチのイデオロギーは小さな商店主、職人、ホワイト・カラー労働者などからなる下層中産階級によって、熱烈に歓迎された。・・・ナチのイデオロギーがなぜそんなに下層中産階級に共感をよびおこしたかという問題の答えは、下層中産階級の社会的性格にうちに求められなければならない。かれらの社会的性格は、労働者階級や上層中産階級や1915年の戦争以前の貴族の社会的性格とはいちじるしくことになっていた。・・・1924年から1928年のあいだ、下層中産階級に経済的向上と新しい希望とがもたらされたが、これらの収穫も1929年以後の不況によって拭いさられたしまった。インフレの時期と同様に、中産階級は労働者と上層階級とのあいだに挟まれたもともと無防備な集団であるため、それはもともとひどい打撃をうけた」のである (*Fromm*, 1941, pp.182-185; 234-236頁)。

それゆえ、この点を再確認しておくことが重要であることは言うまでもない。「政党次元におけるこの不安定に対応するのが、都市におけるプロレタリア大衆と中間層のサラリーマン大衆、つまりブルーカラーの大衆とホワイトカラーの大衆という二種類の大衆の意識であり、姿勢だった。プロレタリア大衆が共産党あるいは社会民主党支持だったのに対し、急速に数を増やして都市の

「大衆」の主要な構成要素となった「サラリーマン」は、精神的に根無し草だった。かれらは「大衆社会」においては、古典的な「ブルジョワ対プロレタリアート」という図式では、規定することのできない存在だった。そして結局ファシズムの温床となったこの層こそ、第一次大戦後のベルリンの「大衆文化」のアンビパランスの根源だった」（平井、前掲書、11頁）。

しかし、ここで注目したいのはそのようなナチズム生成の一般的公式や二種類の大衆の存在様式がもたらした社会的影響ではない。そうではなくて、このような大衆の台頭によってその存在を脅かされるもう一つの重要な社会階層、すなわちドイツ文化の担い手であった教養市民層＝知識人あるいは「読書人」層の位置である。

2 教養市民層

マンハイムは近代市民社会には二重の社会的な根があると指摘している。「近代のブルジョワ階級は最初から二重の社会的根源をもっていた。それは一方では資本の所有者から、他方では自己の教養を唯一の資本としていた諸個人から、作られた。したがって、所有と教養との階級ということが語られたのであるが、その場合、教養あることが所有と必ずしもイデオロギ的に合致したわけではない。それであるから、階級対立がますます激化してゆく世界の真只中に、単に階級に方向づけられた社会学によって捉えるのが非常に困難であるか、また全然捉えられないが、それにもかかわらず、その特殊な社会的事情の点で非常によく特徴づけられることのできる一つの階層が発生するのである。この階層は中間を形作っているが、しかしけっして階級上の中間を形作っているのではない」（Mannheim, 1929, S.136-137; 166頁）。

マンハイムとホルクハイマー、アドルノに代表される亡命社会学者の理論的変容をドイツ型大衆社会と英米型大衆社会との差異に求めようとする本論にとって、彼等がワイマール期ドイツにおいてどのような社会的位置におかれ、自らの知識人としての社会的役割をどのように自己了解していたかを確認する作業は重要である。ここではそれを、フリッツ・K・リンガーの『読書人の没落

——世紀末から第三帝国までのドイツ知識人——』 (*The Decline of the German Mandarins; The German Academic Community, 1890-1933*. 1969) に沿って確認しておきたい。

ドイツにおけるブルジョワ文化の担い手は独特の教養市民層であったが、19世紀以降急速に産業社会化したドイツでは、この文化の担い手と政治・経済の担い手とがうまく統合されなかった。そのため文化はジャーマン・マンダリンと称される精神的貴族に独占され、それゆえに大衆文化との間に大きな亀裂を生むことになった。このような形での教養市民層＝読書人層の形成はドイツの特殊性に由来するものである。

「読書人階層が典型的な形で社会内部において有力な地位を獲得することができるのは、一定の特殊条件が整っている場合に限られる。とりわけ、経済の編成が農業を中心とする時代と工業化の最盛時代との中間期にある時、読書人は繁栄を謳歌する。この中間段階ではまとまった量の流動資本の所有はまだ広くいきわたっておらず、社会的身分の資格証明としても一般に受入れられていない。他面、土地所有に基づく世襲の特権はあいかわらず有力であるとはいえず、もはや社会的身分の絶対的必要条件ではない。こうした状況の中では、学歴と職業上の身分が、貴族階級の伝統的威光に匹敵する社会的地位の要求にとって唯一重要な基礎となりかねない。たしかに、もし企業家中産階級が少なくとも自己の独立を擁護できるくらいに急速に成長しかけていれば、ダニエル・デフォーやベンジャミン・フランクリンの伝で非貴族の教養層も工業と新興階級に味方する方を選ぶかもしれない。それに対して、もし工業化が遅れていて国家の統制下にあり、伝統的な社会組織が遅くまで存続している場合には、市民的知識人が教養ある人々の権利ばかりに目を向ける可能性はずっと高い」 (Ringer, 1969, pp.6-7; 4-5頁)。

つまりこれらの教養知識人層は、いまだ社会が完全に工業化されていない近代化の段階に最も適合的な存在であり、世襲の伝統的権利や経済的な富によってではなく、主として教育による資格によって身分上の保証を得た文化的エリートであった。彼等は広い教養と高い理想によって、いわば精神的貴族たら

んとしていたのであり、実用的知識や大衆の意識には無関心であった（7）。「ドイツ的教養理念とは、また、ドイツ教養市民層とは何か・・・教養 Bildung とは、要するに、かけがえのない個々人の人格を真善美の各方面にわたって磨き、完成させることを意味する。そしてそのためには大学において学問 Wissenschaft に親しむことが不可欠の前提となるが、その場合の学問とは実用性を排した学問のための学問、そしてそれ自体が内的連関をもった総合的な学問でなければならないとされる」（野田、1988、426頁）。

3 「読書人の没落」と社会学

工業化が進捗し都市化による大衆文化が興隆すると、ドイツ教養市民層はそれを危機として受けとめた。リンガーの言う「読書人の没落」は、経済構造の変化という点から見れば、主としてドイツが短期間に世界最大級の工業国家に成長したことに起因する。大企業カルテルを中心とする経済界は新しく強大な勢力圏を形成し政治権力と結びついた。また一方では、工業化によって大都市に大量に発生した労働者階級を中心にマルクス主義が求心力を持ち、これまで彼等教養市民層が演じてきた政治的・社会的・文化的役割に異議を唱えるようになった。加えて、工業化と連関した自然科学の突出と、学問の専門化・細分化ならびに大衆の高等教育への進出は、教養市民層の前提である学問全体の総合性や人格の陶冶という理念を危うくしはじめた（8）。

都市大衆文化が伝統的市民文化の破壊者として登場したのはドイツに限ったことではない。例えばマンハイムとともに大衆社会論の先駆者として知られているスペインのオルテガ・イ・ガセットも『大衆の反逆』（1930年）の中で大衆のこのような側面を強く意識していた。だがドイツの場合には、急速な工業化による大衆化と教養主義の牙城という二つの側面を持ちつつ、それらがワイマール期という複雑で混乱した時代に同居したことにその特性がある。第一次世界大戦後の社会的・文化的状況は、彼等知識人にとっては深刻な危機と感じられた。「エルンスト・トレルチ、マックス・ウェーバー、フリードリヒ・マイネッケ、マックス・シェラー、カール・マンハイムといった知識人たち

は、新しい文化状況と伝統的価値を何とか均衡させようと、死力を尽くした。その努力は空しかった。しかしその空しい努力自体が伝統的価値の「清算段階」として、1920年代の文化状況を構成している。その点では知的エリートの精神態度も、結局は大衆社会状況の関数だったのである」（平井、前掲書、15-16頁）。

ここには、戦間期ドイツの特殊な社会的・文化的状況に何とか対応し、状況にふさわしい解答を見つけ出そうとする社会学者達の努力が見て取れる。そしてこのような情勢下にあって、確かにマックス・ウェーバーやゲオルグ・ジンメルは合理性のパラドクスと「文化の悲劇」の前で悲観的たらざるを得なかった。

「近代ドイツの社会学は読書人の近代派的発想の嫡出子であり、この親を離れて理解することはできない。社会学は近代的社会状況に対する読書人独特の悲劇的な態度を反映していた。社会学は社会組織の前資本主義的形態に対する資本主義の破壊的作用と取り組み、この過程が政治生活と文化生活にもたらした攪乱作用の結果を追求し、さらに近代社会における人間関係についてのやっかいな問題を提起した。・・・しかしまた社会学は資本主義的中産階級にも根ざしていなかった。どちらかといえばドイツ社会学者は知的な面でマルクスの恩恵をこうむっていたが、しかしこの恩恵を必ずしも全面的に認めなかったし、プロレタリア的社会主义に対して義理があったわけでもない。彼らは読書人であり、自分たちのために語ったのである。諦念はすべての近代派の社会理論を象徴する感覚であった。近代派の学者たちは正統派の同僚と違って、近代からの完全な逃避などあり得ないということを知っていた。彼らは、近代生活のある面を不可避的な、あるいは望ましいものとして受け入れるべきだとしたが、他方では近代生活の偶然的で許容しがたい面を抑制しようとした。こうした態度のため、近代派の学者たちは新しい環境に対する感情的反発を抑え、悲劇的状况に直面して合理的明晰性という英雄的理想を維持する方向に向かった。彼らは偽善と破滅的絶望よりも分析の方を選びとった。つまり科学的となったのである。・・・これが社会学という学科が生み出された際の精神であ

り・・・」(Ringer, 1969, pp.162-163; 109頁)。

しかし、後に英米に亡命することになったマンハイムに代表される若手の急進的近代派社会学者達は、これとは異なったもっと別のそして重要な役割を与えられていた。これには、マンハイムやホルクハイマー、アドルノ達がもとのドイツ教養知識人の文化から見れば「異邦人」的立場に立っていたからかも知れない——マンハイムはハンガリー出身のユダヤ系亡命者として、ホルクハイマーとアドルノはユダヤ系マルクス主義者として。

4 二つの大衆社会の出会い

ワイマール期ドイツの社会学者に課された仕事は、一つには、大衆化による精神的価値の危機に対処することであったが、それは同時に、古いタイプの教養主義に凝り固まった正統派に抗して近代化の進展を一定の仕方でも容認し、場合によっては大衆的意識の側に立つことでもあった。ただし、その場合には、旧来の「精神」的なものの空白を埋めようとする様々な代替物相互の闘争に身をさらさねばならなかった。マンハイムが『イデオロギーとユートピア』という形で表した時代の全体的状況がまさにそれである。

啓蒙主義以来の近代市民社会の遺産である哲学的・精神的なもの、新たな時代の主役に躍り出た大衆文化のメンタリティとの相剋と統合は、ドイツにおいては避けて通ることのできない関門であった。ドイツの近代化が英米と異なった特殊なあり方をしていなければ過剰な教養主義は形成されなかったであろうし、急速に工業化したのでなければ教養主義と大衆文化の間にはもっと緩やかな相互作用が可能であったろう。また、第一次世界大戦の敗北という契機がなければ、マルクス主義思想の影響はより柔軟な形をとったであろう。だが、そうならなかったところにワイマール期ドイツの思想的豊穡性が生まれたのだから、その後の社会学の世界的発展にとってはむしろ幸運であったと言ふべきである。

ワイマール期ドイツの学問的状况は迫り来る本格的な大衆社会＝産業化された大衆社会の到来に向けて、自らの知的伝統を対自的に総合すること——マンハ

イムの表現を借りるならば「総合の問題」(Das Problem der Synthese)——にあった。それはイデオロギー的には自由主義とマルクス主義ならびに保守主義とを総合することであり、文化的には知識人の教養主義と都市の大衆文化を総合することであった。それは、「精神」の空白による価値のアンサーキーと大衆を取り込もうとするファシズムへの知的抵抗でもあったが、1933年のヒトラー政権とそれに続く大戦によって、そのような知的相剋の場そのものが失われてしまった。

ナチの台頭によって亡命を余儀なくされた社会学者の大部分が都市のユダヤ系知識人であり、しかも大なり小なりマルクス主義的影響を被っており、ドイツ内部では近代派の、それも急進的な近代派であったことの意味は大きい。彼等は近代化の進展そのものは否定せずに、同時に大衆的メンタリティの問題性あるいは精神的価値の没落に対して鋭い感覚を持ち合わせた人々であった。その際、彼等はお互いの理論的抗争の中から、社会を全体として問題化し社会それ自体を対自化して批判的に取りあげるといふ指向性を磨き上げていった。

そのような学問的態度はワイマール期ドイツの情勢が彼等知識人に強い問題状況ではあるが、ここで練り上げられた成果は、それを生み出したドイツ社会そのものが再度の敗戦によって消滅した後も消えることがなかった。マンハイム、ホルクハイマー、アドルノ、フロム、マルクーゼ、レーデラー、ガース、ヴォルフ等は、このワイマール期ドイツにおいてドイツ型大衆社会の生成途上で問題化された問題意識とパースペクティヴを英米型大衆社会に持ち込み、後者にはなかった要素を新たに付け加えるとともに、自らが巢立った社会の行く末をもそこに発見したのである。そしてそのことは、彼等の近代派的側面を刺激し、固有の理論的変容と飛躍をも可能にした。それはドイツ型大衆社会と英米型大衆社会という、二つの異なるタイプの大衆社会の出会いと言ってもよい事件であった。

アメリカ・イギリスの社会は、すでにマンハイムやアドルノが指摘していたように、ドイツとはその構成が異なる大衆社会であった。そこでは産業社会とデモクラシーが一致し、大衆文化の対立項となるような教養主義的文化は稀薄

であった。それはまた、産業社会の成長という点ではドイツよりも一層進んだものであると同時に、大衆社会としては、教養主義という前提なき大衆文化を、ある意味でスムーズに発展させてきた社会であったとも言えよう。いわば<即自的大衆社会>である。教養主義的文化やマルクス主義的政治文化という深刻な対立項を欠き、産業化と大衆化が問題なく結びつくことで生成してきた大衆社会としてあった。これに対してドイツ型の大衆社会は<対自的大衆社会>であったと言える。

ドイツ型大衆社会の知識人達は、教養市民層の没落とイデオロギー的対立状況の下で、自らとその社会に対して対自的たらざるを得なかった。彼等の社会が苦悩の中から新旧の相剋を伴いながら大衆化しつつあったがために、大衆社会というものが持つ問題点をいち早く察知し、それが問題化される際の理論的パースペクティヴを蓄積・彫琢する機会に恵まれた。その意味でワイマール期ドイツの社会科学には、やがて来るべき本格的な大衆社会に向けての<理論的先駆性>があったと言える。

これに対して、初めから即自的な大衆化を実現しつつあった英米の社会には、そのような意味での対立項が明瞭な形で存在しなかった。それゆえ、産業化された大衆社会の問題と病理を分析するにあたっての理論的蓄積は乏しかった。だが、ドイツよりも進んだ産業化段階にあった英米の大衆社会は、現実的先行性という点でははるかにドイツよりも優っていたのである。ここに二つの大衆社会の出会いがある。ドイツの理論的先駆性は英米の現実的先行性にとって不可欠の<知的媒介項>となり、また同時に、後者の現実的先行性がドイツ語圏からやってきた亡命知識人の理論的發展にとって重要な媒介項となった。

次節では、この点をマンハイムとフランクフルト学派（特にホルクハイマーとアドルノ）に則して検証してみたい。

—以下、次号

注 (一)

(1) コーザーはこの「脱地方化」(deprovincialization) という用語をヒューズのスミソニアン研究所での講演からとっている (H. Stuart Hughes, "Social Theory in a New Context", paper delivered at a lecture series at the Smithsonian Institution, spring 1980)。

(2) マンハイムの『変革期における人間と社会』は二つのヴァージョンがあるが、ここで引用しているのは1940年の英語版である。その前のドイツ語版は“*Mensch und Gesellschaft im Zeitalter des Umbaus*”と題してオランダの出版社から出版されているが、E・シルズによる英訳版が一般的であり、繰り返しリプリントされている。

ドイツ語版は三部構成(「現代社会における合理的要素と非合理的要素」「現代における文化的危機の社会的諸要因」「計画の段階における思考」)であるが、英語版では序論と新たな三部が追加されている(「危機・独裁・戦争」「自由のための計画」「計画の水準における自由」)。

一般にマンハイムのイギリス亡命後の理論的変化はこの著作から始まると考えられている。ヒューズのように断絶を見る者、B・ロングハースト(Longhurst, 1989)のように理論的発展の一貫性を見ようとする立場、G・W・レムリンク(Remmling, 1968)のようにドイツ語版と英語版の間にある差に後期マンハイムの理論的出発点を確認しようとする研究者もある。本論の目的はこのようなことがらを委細に検討することではないので、マンハイム研究に関連する学史的文献を網羅的に参照することは避けたい。これらの点についてはわが国でもすでに詳しい研究がある(秋元・澤井、1992; 秋元、1993)。

(3) 「ワイマル時代の生き残りの一人であるカール・マンハイムは、その時代が終わらんとする直前にハンナ・アレントに向かって、将来の人びとはワイマルをギリシアのペリクレス時代の再来としてふり返ってみることだろうと誇らしげに語ったという。……ワイマル共和国の文化諸領域での実験的効果、そ

の多産性は、やはりそれとしてきわめて大きな、矚目すべきものであった。実際、たとえば哲学・思想の場面で今日あらためて問題として考察をせまられている諸問題の多くは、まずこの1920年代のワイマル・ドイツにおいて提起され、先駆的な考究が試みられているのである。あえて私が「現代思想の坩堝」としてこの時代をとらえようとするゆえんである（生松、1979、110-111頁）。

（4）ラザースフェルドはアメリカにおける調査研究に大きな影響を与えたが、そもそも彼は社会学の教育を受けたことがなく、大学の学位は応用数学である。故郷ウィーンでは社会主義の青年リーダーであったが、やがて調査研究で頭角を表し、ロックフェラー財団の奨学金を得て1933年にアメリカにやってきた。その一年後にオーストリアの政治情勢が急変したために、ユダヤ人でありかつ社会主義者でもあった彼はアメリカに留まることにした。このような学問的経歴や移住の経緯から見ても、ラザースフェルドは他の社会科学系亡命知識人とはやや傾向が異なっている。

しかしながら、ラザースフェルドがアメリカで成功した理由も、実際には大衆社会の生成という基盤に基づいている。「ラザースフェルドがアメリカに来たのは、ちょうどサーヴェイ・リサーチへの関心が生まれはじめた時であった。これを発展させる上での彼自身の成功は、人間行動の源泉に焦点を当てた彼の研究が、この分野をなお支配していたまだまだ粗雑な行動主義的見方に満足していなかった若い社会学者たちの聳てた耳に届いた、ということによるところが大きかった」（Coser, op.cit., p.115; 126頁）。ラザースフェルドの成功が意味するものは、ドイツ＝オーストリア圏の大衆社会化とアメリカのそれとはその生成様式に違いがあるにもかかわらず、大量現象としては同じだったということである。

（5）ホルクハイマーが自分達の立場を「批判理論」という言い方で特徴づけるの1937年の論文「伝統的理論と批判的理論」（Traditionelle und Kritische Theorie.）以降であるが、「フランクフルト学派」という名称が一般に流布す

るようになるのは「50年代にアドルノがホルクハイマーとともに亡命先のアメリカからドイツへ帰り——マルクーゼやフロムはアメリカに残る——、「社会研究所」を再建して華々しい活動を始めて以来」（徳永、1994、4頁）である。

（6）ここで彼等の「全体性」概念そのものについての立ち入った考察を再踏査する余裕はない。本論の目的から大きく逸脱してゆくことにもなる。フランクフルト学派の「全体性」概念については [Jay, 1984] を、またマンハイムのものについては [三上、1993]、その他 [Jay, 1986; 徳永、1968] を参照。マンハイムとフランクフルト学派の関係について、本論との関係ではマーチン・ジェイの次の指摘が興味深い。

「ホルクハイマーが最初に発表した論文は、マンハイムの『イデオロギーとユートピア』——これは1930年に雑誌『社会主義と労働運動の歴史』に掲載された——を手ひどく攻撃したものであった。ホルクハイマーが批判的吟味の最初の対象としてマンハイムを選んでいることは、それ自体、重要である。だがもっと重要なのは、それ以来、フランクフルト学派として知られるようになった他のメンバーも、マンハイムと知識社会学にくりかえし立ち戻った、という点にある。……知識社会学とそれに関連したイデオロギーの問題、あるいは正しい意識と虚偽意識などは、明らかに、ホルクハイマーと彼の仲間が著しく重要だとみなしていた問題である。というのも、実証主義とその補完物である歴史主義がそろって崩壊するとともに、ブルジョア思想家もマルクス主義の思想家も、自分の価値体系を相対主義から守れるような基礎を確立する必要に直面するようになったからである。……1914年以前には意味を保持していた知識人たちにも、意味の危険を普遍的に及ぼしたが、戦後になると、彼らに代わる何人かの新しいブルジョア知識人が登場した。……だがこれらのいずれも、ブルジョア的価値の危機を十分に扱えなかった。この危機の起源は単に文化の領域だけに見出されるものでなかったのである。

混乱のみなもとは文化よりもむしろ社会であることが認識されると、他の知識人たちは、マルクス主義運動においてもその周辺においても、知識社会学が

可能な答案であると、考えるようになった。大ざっぱに言うと、これがゲオルグ・ルカーチやカール・コルシュなどの新ヘーゲル主義者とフランクフルト学派によってとられた方針であった。しかしそれはまた、マルクス主義者ではなかったカール・マンハイムがとった方針でもあった。マルクス主義の立場に対するマンハイムの挑戦は、文化と社会の連関をマルクス主義者と同様に強調するので、なによりも重要だったのである」(Jay, 1986, pp.63; 119-120頁)。

(7) ドイツ教養市民層のこのような知的貴族主義がまたナチズム発生の母体でもあったという次のような指摘も重要である。「それにしても、ドイツのプロテスタント系大衆が19世紀末の段階でまず労働者を中心にマルクス主義の意味体系によってとらえられ、ついで第一次世界大戦後になってのこされた中間層を中心にナチズムによってとらえられていったのはどうしてなのか。……こうした類のものがイギリスでは大衆をとらえることがなかったのに、……結局のところ、教養市民層というこの国のプロテスタント系エリートの存在とふかかかかわっているであろう。すなわち、ドイツ型エリート層がプロテスタント大衆を精神的空白状態のもとに放置したまま自分たちだけのゆたかな文化と学問を育ててきたという、あの文化の二分状態こそ、マルクス主義およびナチズムの台頭にたいして責任があると考えられるのである。……ごく単純化していえば、イギリスではアングリカニズムの基盤に立つエリート層＝ジェントリー層の文化に対抗して非エリート大衆の側に非国教主義の文化が発達し、両者の間で宗教を介して活発な交互作用が見られたのにたいし、ドイツでは非エリートの側にはほとんどいうに足る対抗文化が発展を見なかったのである。この大衆レベルの精神的空白部分にこそ、19世紀末に工業化が急速に進んだとき、まずマルクス主義が大衆宗教として入り込んできたのだった。そしてこれによってドイツ的教養理念の拠って立つ基盤が大きく揺らいだのだが、それにたいして教養市民がしめした対応もまたきわめてドイツ的であった。つまり、教養市民は彼らだけであらゆる方向に教養理念に代わる救済のよりどころをもとめていくのであり……」(野田、1988、431頁)。

(8) 大学における学生数急上昇とその構成の大衆化が彼等の危機感を高めた。「基本的に「金権的」な方向に向かう、緩やかな移動という仮説は、ドイツの教授資格許可の取得者について、1860～1889と1890～1919とを比較することによって確認される。高級官吏、教授、中等学校教師、将校、大卒専門職従事者の子弟は二つの期間の間に65パーセントから52パーセントに減っている。地主と農民、それに労働者の子弟の場合、比率はほぼ同一であるが、実業界のあらゆる部門の会社の所有主、経営者、幹部職員などの新エリートの子弟は6パーセントから13パーセントに伸びている。また下級官吏と教師の子弟は7パーセントから9パーセントへ、熟練工と職人の子弟は13パーセントから18パーセントに増えている」(Ringer, 1969, p.59; 39頁)。こうした現実こそが、大衆が高等教育に侵入して伝統的教養の水準を脅かそうとしているという、読書人たちの強い危機感の背景にあったものである。

ちなみに、戦間期に社会科学を担った大学教授達の政治文化的傾向を素描しておくならば、まず、大多数の保守的で伝統的な正統派がおり、これに対して近代派とよばれる一群の学者達——ウェーバー兄弟、トレルチ、マイネッケ等がいる。さらにこれに加えて、より急進的な近代派(何らかの形でマルクス主義の影響を受けていることが多い——例えばマンハイムやレーデラー)が存在した。マンハイムが正教授としてあったフランクフルト大学は1914年に開設されたが、それに続いて開設されたハンブルク、ケルンの両大学と並ぶ新しい都市型大学であった。ここではこれ以上触れないが、この点に関してのより詳細な記述、ならびにそこでのマンハイムの位置、フランクフルト学派等については以下の文献を参照(Ringer, 1969; Jay, 1986; 秋元、1993)。

* 以下の注ならびに欧文アブストラクトは次号に掲載

文 献

- Adorno, T.W., Frenkel-Brunswik, E., Levinson, D.J., Stanford, R.N., 1950: *The Authoritarian Personality*. Harper & Brothers. 田中義久・矢沢修次郎・小林修一訳『権威主義的パーソナリティ』青木書店、1980年
- Adorno, T.W., 1968: Scientific Experiences of a European Scholar in America. in : Fleming, D., Bailyn, B., ed., *The Intellectual Migration*. Harvard Univ. Press. 「アメリカにおけるヨーロッパ系学者の学問的経験」、荒川幾男・山口節郎・近藤邦夫・今 防人訳『亡命の現代史4 知識人の大移動2 社会学者・心理学者』みすず書房、1973年
- Berger, P.L., 1977: Toward a Sociological Understanding of Psychoanalysis. in : *Facing up to Modernity*. Basic Books.
- Coser, L.A., 1984: *Refugee Scholars in America; Their Impact and Their Experiences*. Yale Univ. Press. 荒川幾男訳『亡命知識人とアメリカ——その影響とその経験』岩波書店、1988年
- Frisby, D., 1983: *The Alienated Mind*. Heinemann.
- Fromm, E., 1941: *Escape from Freedom*. Holt. ; *The Fear of Freedom*. 1942, R.K.P. 日高六郎訳『自由からの逃走』創元新社、1951年
- Horkheimer, M., 1937: Traditionelle und Kritische Theorie. *Zeitschrift für Sozialforschung*. 久野 収訳「伝統的理論と批判的理論」『哲学の社会的機能』晶文社、1974年
- Horkheimer, M., und Adorno, T.W., 1947: *Dialektik der Aufklärung ; Philosophische Fragmente*. Querido Verl. 1969, S.Fischer Verl. 徳永 恂訳『啓蒙の弁証法』岩波書店、1990年
- Hughes, H.S., 1958 : *Consciousness and Society ; The Reorientation of European Social Thought 1890-1930*. Alfred A. Knopf. 荒川幾男・生松敬三訳『意識と社会——ヨーロッパ社会思想——』みすず書房、1970年
- Hughes, H.S., 1975 : *The Sea Change ; The Migration of Social Thought 1930-1965*. Haper & Row Publishers. 荒川幾男・生松敬三訳『大変貌——社会思想

の第移動、1930～1965——』みすず書房、1978年

Jay, M., 1984 : *Marxism and Totality ; The Adventures of a Concept from Lukacs to Habermas*. Univ. of California Press. 荒川幾男・今村仁司他訳『マスキス主義と全体性——ルカーチからハバースへの概念の冒険』国文社、1993年

Jay, M., 1986 : *Permanent Exiles ; Essays on the Intellectual Migration from Germany to America*. Columbia Univ. Press. 今村仁司・藤沢賢一郎・竹村喜一郎・笹田直人訳『永遠の亡命者たち——知識人の移住と思想の運命』新曜社、1989年

Kornhauser, W., 1959 : *The Politics of Mass Society*. Free Press. 辻村 明訳『大衆社会の政治』東京創元社、1961年

Lederer, E., 1940 : *State of the Masses ; The Threat of the Classless Society*. W.W.Norton & Company. 青井和夫・岩城完之訳『大衆の国家』創元新社、1961年

Loader, C., 1985 : *The Intellectual Development of Karl Mannheim*. Cambridge Univ. Press.

Longhurst, B., 1989 : *Karl Mannheim and the Contemporary Sociology of Knowledge*. Macmillan Press.

Mannheim, K., 1929 : *Ideologie und Utopie*. 5. Aufl., 1969, Schulte - Bulmke, 「イデオロギーとユートピア」樺 俊雄監訳『マンハイム全集4』潮出版社、1976年

Mannheim, K., 1935 : *Mensch und Gesellschaft im Zeitalter des Umbaus*. Sijthoff, 1935. 杉野原寿一訳「変革期における人間と社会」、樺 俊雄監訳『マンハイム全集5』潮出版社、1976年

Mannheim, K., 1936 : *Ideology and Utopia*. 1972, R.K.P. 高橋 徹・徳永 恂訳「イデオロギーとユートピア」『世界の名著56 マンハイム・オルテガ』中央公論社、1971年

Mannheim, K., 1940 : *Man and Society in an Age of Reconstruction ; Studies in Modern Social Structure*. 1971, R.K.P. 福武 直訳『変革期における人間と社

- 会』みすず書房、1962年
- Merton, R.K., 1949 : Karl Mannheim and the Sociology of Knowledge. in : *Social Theory and Social Structure*. rev. ed., 1957, Free Press. 森 東吾他訳『社会理論と社会構造』みすず書房、1961年
- Remmling, G.W., 1968 : *Wissenssoziologie und Gesellschaftsplanung — Das Werk Karl Mannheims*. Verl. Fr. Wilh. Ruhfrs.
- Ringer, F.K., 1969 : *The Decline of the German Mandarins ; The German Academic Community, 1890-1933*. Harvard Univ. Press. 1990, Wesleyan Univ. Press. 西村 稔訳『読書人の没落——世紀末から第三帝国までのドイツ知識人——』名古屋大学出版会、1991年
- Ringer, F. K., 1992 : *Fields of Knowledge*. 筒井清忠他訳『知の歴史社会学』名古屋大学出版会、1996年
- 秋元律郎『マンハイム 亡命知識人の思想』ミネルヴァ書房、1993年
- 秋元律郎・澤井 敦『マンハイム研究——危機の理論と知識社会学』早稲田大学出版局、1992年
- 生松敬三「1920年代への関心」『現代思想：総特集——1920年代の光と影』青土社、1979年
- 伊藤美登里「K・マンハイムの知識人論」『社会学評論』46-1
- 徳永 恂「初期批判理論と精神分析——1930年前後の社会研究所にける思想的絵模様——」『現代思想8 批判理論』岩波書店、1994年
- 徳永 恂『社会哲学の復権』せりか書房、1968年
- 野田宣雄『教養市民層からナチズムへ——比較宗教社会史のころみ——』名古屋大学出版会、1988年
- 平井 正「都市大衆文化の成立——1920年代のドイツを中心に——」平井 正・坂本一夫・川本三郎他著『都市大衆文化の成立』有斐閣、1983年
- 三上剛史『ポスト近代の社会学』世界思想社、1993年
- 矢澤修次郎『アメリカ知識人の思想』東京大学出版会、1996年